

## 教員活動状況報告書

提出日：令和 6年 3月 4日  
所 属： 獣医学部 動物応用科学科  
氏 名： 永澤 美保 職位： 准教授  
役 職：

## I ティーチング・ポートフォリオ

## 1. 教育の責任（教育活動の範囲）

（教育活動について何をやっているのか：役職担当・主要担当科目リスト（必修，選択）（受講者数）（学部向け，大学院向け）（學理データ活用）

教師として何に責任を負っているかを明確にし，自分が担当している授業科目に関して数行で説明する。（分量の目安：2～5行（80字～200字）（科目表以外））

※分量（字数）はあくまで目安ですので，超えても構いません。内容を優先して下さい。（以下同じ）

**動物人間関係学：**動物人間関係学は、動物応用科学全般の基盤ともいべき学問である。イヌなどの伴侶動物やヒトの生活を支える家畜動物、それら動物たちとヒトとの関わり方について歴史的背景とともに理解できるように工夫している。さらにその動物種ごとの生理的ならびに行動的特性を学習し、適切な動物との関係性のあり方について考察できるように学生に自主的に学んでもらうよう努めている。自分事として学びを理解してもらうために、学生自身が体験した動物とのエピソードを事前に提出してもらい、それをもとにした授業内容を組んだ。

**介在動物論：**ヒトと動物の共生は互恵的關係を構築しており、この一端が、医療場面などにも活かされつつある。ヒト医療場面における動物介在療法の利用対象となる個々の疾患の概要およびその治療法と介入方法の例について理解を深めてもらうことを目的としている。さらに最新の論文を読み解くことで、「なぜ効果があるのか」の議論の道筋を見出すための知識を身につけ、今後のヒトと動物の共生への考察を促している。今年度は、統計資料を読み解くことで、動物介在活動・療法の求められる現代社会の状況を理解できるよう工夫した。

**動物介在活動・療法演習：**動物介在介入の対象者の立場として動物との実体験を通して効果を実感してもらう。それと並行して、先行論文を検索し、自分自身がなぜ効果があると感じたのかを客観的な手法をもって示す方法を身につけてもらう。今年度は実験計画を立て、自分自身の心拍を測定し、乗馬時と運動時の自律神経活性の違いを解析し考察をしてもらった。特にグラフの作成等、データを可視化することの重要性を理解できるよう工夫した。

**乗馬応用実習：**乗馬の実体験を介した心身への影響を測定し、その解析方法と効果を測る科学的手法を身につける。決して技術論に落ちず、データサイエンスの素質をもって、ヒトと動物の關係性を明らかにする仕組みをいれる。今年度も新型コロナの影響により通常よりも少ない回数で保育園児の乗馬プログラムを実施したが、学生にとっては少ない回数なが

らも真剣に取り組む機会が得られたと感じている。

科目名	学科・専攻	必, 選, 自	配当年次	受講者数
動物人間関係学	動物応用科学科	必	2	150
介在動物論	動物応用科学科	選	3	75
動物介在活動・療法演習	動物応用科学科	選	3	30
乗馬応用実習	動物応用科学科	選	3	17

## 2. 教育の理念（育てたい学生像, あり方, 信念）

1. で説明した教育面での責任を基にしながら自分の教育理念に基づいて自分の教育アプローチについてまとめる。（自分の教育アプローチの説明：なぜやっているのか, 自らの信念, 価値, 目指すもの）（分量の目安：8～12行（320字～480字））

基本的には、「学生の学問に対する興味を高める」「減点方式ではなく加算方式を取り入れて、アクティブラーニング的要素を取り入れる」「双方向性を重要視し、授業中に学生に対する質問を多く投げかける」「成果物の良いものを例として出し、欠点指摘ではなく、優秀点の評価型とする」を通して、学生が自主的に学び、自分の興味を追求できるようにする。その中で、データサイエンスやサイエンスリテラシーが次第に身につくように工夫する。これを通して、答えのない実社会で、臨機応変に対応して、自主的に作業し、成果をだせるような人材育成を目指す。担当科目については「ヒトと動物の共生」について、表面的な理解ではなく、他の動物の行動や生命を自在に扱うことができってしまう人間としての葛藤を感じ、そのうえで自分自身の答えを見出そうとする経験を通して、新たなヒトと動物の共生を考えてもらうことを意識している。

## 3. 教育の方法（理念を実現するための考え方, 方法）

教育の目的と目標（これまでの教育経験においていつも行っていること。重要視していること。自分の教育を特徴づける方法）（分量の目安：15～24行（600字～960字））

ヒトと動物の関係に関する固定概念を壊すことから始めている。歴史的な経緯や文化による違い、一般的に美談として扱われていることの裏側等、様々な視点からヒトと動物の関

係を見直すきっかけをつくり、そのうえで、生物学的な知識を持つことによって、科学的な態度で考える機会を多く設けることに努めている。学生の学問に対する興味を高めるために、時事ネタや学生自身の経験に基づいた動物との関係を講義に盛り込むことを意識している。また、双方向性をあげるために、なるべく異なる多くの学生の課題を取り上げて、毎時間に紹介するようにしている。

#### アクティブラーニングについての取組

上述の通り、学生自身が課題に対して調査し、課題を提出するなど、多くの座学科目でアクティブラーニングを取り入れている。実習においても、技術習得に加え、課題や目的を設定させ、その目的から、理論仮説、作業仮説の設定、データの解析、考察を自らが実施しており、深いアクティブラーニングが実施できている。

#### ICT の教育への活用

授業中に出す課題に関しては、その場で提出を求めているため、すべての学生が PC を用いて参加することになる。コロナ後は締切日を延長しているが、提出課題は学理や Google Form の活用で随時確認している。また実習においても、データシェアリング、解析の共有、スライド発表もすべてオンラインでできるように指導し、ICT はフル活用している。逆に ICT を使わない授業、実習はやっていない。

#### **4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）（分量の目安：15～24 行（600 字～960 字））** 現在の授業実践・教授手法をどのように改善していますか。

（①から⑤まで個別に記載又は①から⑤までまとめて記載ください）

①教育（授業，実習）の創意工夫（A）

②学生の理解度の把握（B）

③学生の自学自習を促すための工夫（A）

④学生とのコミュニケーション(質問への対応等)（B）

⑤双方向授業への工夫（B）

上記の通り、②を除く点は充実化させてきている。②の学生の学力の把握は、課題提出からある程度の把握はできているものの、その変動を個々に調べ、学生の成長としての評価はできていない。

#### **5. 学生授業評価（分量の目安：4～7 行（160 字～280 字））**

①授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。

難しい単語は、平易な言葉で再度説明した。不明な点がないか、都度学生に意見を求めるようにした。困難な点は、具体例を上げることで、学生の理解を促した。

② ①の結果はどうでしたか。

一部の学生には効果があったが、効果のない学生もいた。

③ ②を踏まえて次年度はどのように取組めますか。

初年次教育におけるアクティブラーニングの姿勢を身につける全学的な取り組みが無い限り難しい。効率的な教育体制の充実化を期待する。

**6.学生の学修成果（分量の目安：4～7行（160字～280字））**

①学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。

（参考となる取組については、学内で共有させていただく予定です。）

昨年度と同様に、課題に対するポイントの説明、データサイエンスにおけるデータの扱いなどを、説明し、サイエンスリテラシーの向上を目指している。いくつかの科目では、小論文課題を複数回提出させている。毎回の提出後、文章構成や書き方など、ポイントを説明。優秀な課題や新たな気づきにつながる課題に関しては、実名をあげて紹介している。

②教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価

特になし。

**7. 指導力向上のための取組（FD研究会参加状況）（分量の目安：1～2行（40字～80字））**

オンラインで参加し、教育理念の構築の重要性がわかった。この概念形成をもとに、教育構成を再考している段階にある。

**8. 今後の目標（理念の実現に向かう今後のマイルストーン）**

教育活動に関する今後の目標を記載してください。短期的な目標と長期的な目標を分けて記載してもかまいません。（分量の目安：3～6行（120字～240字））

短期的には、課題の抽出（なぜ？と考える）、それに対する自分なりの答えを表現する機会を設けることで、自分自身の言葉で説明ができるようにする。長期的にはサイエンスリテラシーとコンピテンシーの向上を目指す。

**9. 添付資料（根拠資料）（※）資料名のみ**

※資料については非公開扱いのものもありますので、資料名のみを記載してください。